



日本大学獣医学科卒業。矢数動物病院（神奈川県相模原市）や、日本動物高度医療センター・循環器科（神奈川県川崎市）での勤務を経て、2008年、東京都町田市に「谷口動物病院」を開院。飼い主さんとの対話を大切にした診療をモットーにする。日本獣医循環器学会会員

## 獣医さん の 診察室から

vol.78

日夜動物たちが訪れる診察室から、  
飼い主さんへのメッセージをお届けします。

愛犬が5才を過ぎたら、  
健康への意識をさらに高めて

谷口先生は「予防医療」と「早期発見」の大切さを訴えて、その実践と啓蒙に努めている獣医さん。  
「犬は『痛い』『苦しい』と言って、体の不調を訴えないので、飼い主さんは愛犬の病気の発見が遅れることがあります。また、以前よりも犬の寿命が延び、予防医療と早期発見がますます大切になってきたと実感します。愛犬のかかりつけ病院は、病

気を治すということだけでなく、病気になるための場所と考えるてもらいたいですね。毎年ワクチン接種を受けたり、病気の予防の観点から早めに不妊・去勢手術を受けさせたり、早期発見のために定期的に健康診断を受けさせましょう。まだ若いと思うかもしれませんが、後悔しないように愛犬が5才を過ぎたころから、愛犬の健康に対する意識をさらに高めたほうがいいです」

予防と早期発見の大切さを飼い主さんに伝えるために、谷口先生は院内で相談セミナーを開いたり、さまざまな活動に取り組んでいます。

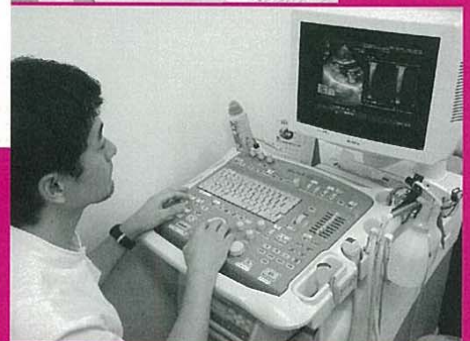
### シニア期に生活の質を下げる 心臓病に気をつけて

そんな谷口先生がとくに力を入れているのが、循環器疾患の診療です。「心臓病はどんな犬でもなり得る病気で、10才を超えるとその発症率は2〜3割と言われます。心臓病で犬に多いのが、僧帽弁閉鎖不全症。心臓の中にある、血液の逆流を防ぐ働きをする弁がしつかり閉じなくなる病気で、シニア期にこのような心臓病をわずらうと、呼吸困難や激しいセキなどが起こり、体に大きな負担がかかります。体の不調から気持ちの面もしんどい状態に陥りやすく、犬の生活の質がガクッと落ちてしまいます」

心臓病の場合、初期症状の時点で気づいて来院する飼い主さんが少ないと、谷口先生は指摘します。

「心臓病の初期段階では、目立った症状はあまりなく、ときどき軽いセキをする程度。そのため、この時点

専門的な検査にも対応できるように超音波検査器を完備（写真下）。検査結果や病気の治療などについて、飼い主さんに丁寧に説明します（写真左）



診察室はガラス張りにし、明るい雰囲気。来院する飼い主さんに安心感を与えています

で病気を疑って来院する飼い主さんはきわめて少ないです。ほとんどの飼い主さんは、愛犬に明らかな呼吸困難や食欲不振、元気消沈などが見られてから来院します。でもそれでは遅く、心臓病がかなり進行した状態のこともあるんです。シニア期も生活の質を落とすことなく、まだまだ元気に不自由なく過ごしてほしいですね。心臓病は飼い主さんが早期に発見しにくい面があります。だからこそ、若いうちからの予防や、健診など早期発見が大切なのです」



### 谷口先生からのアドバイス 周囲に犬を迎える人がいたら、 「犬のこと」を教えてあげて

私の病院では、犬を迎える前の人や、飼い始めの方向けに「どうぶつを飼う前に」というセミナーを実施。「飼ってみたら大変」「知らないことだらけ」という声を少しでも減らし、飼い主さんと愛犬にいい関係を築いてもらうのが目的です。すでに愛犬と幸せに暮らしている飼い主さんも、まわりに犬を迎える予定の人がいたら、犬について教えてあげるといいですね。最低限知っておきたい「しつけの大切さ」と、「ワクチン接種やフィラリア予防などの健康管理」。人に教えることで、飼い主さんたちの啓蒙意識がどんどん広まり、人にとっても犬にとっても、もっと住みやすい社会が生まれるのではないでしょうか。